令和7年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【文蔵小学校】

① 今年度の課題と学力向上策

	学習上・指導上の課題		学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	＜学習上の課題＞ 算数「数と計算」 ＜指導上の課題＞ 個人差が大きい。学年が上がると正答率が低下していることや、下の学年のうちから計算問題の無回答率が高いことから、より確実な学習内容の定着が求められる。	⇒	低学年においてはデータを活用して習熟度を確認しながら、デジタルドリルやプリントに取り組む。【週に1度】 高学年においては児童が自分の苦手を把握し、自主学習の計画を立てたり、学びを振り返ったりするような時間を設定する。【週に1度】 SSDBの授業アンケートから、実態を把握して、追加の課題を与えたり、重点的に個別に指導したりすることができるようにする。【単元ごとに1回以上】
思考・判断・表現	＜学習上の課題＞ 国語「書くこと」「読むこと」 ＜指導上の課題＞ 物語文の正答率が低く、無回答率も他に比べて高い。登場人物の言動や場面の変化に気を付けながら読む力を付けていく必要がある。また目的や意図に応じて、文章だけでなく図表を用いて書く力も不足している。	⇒	学びのポイント「じ・し・ゃ・ク」を意識した児童主体の授業を日々実践する。【毎時間】 それら実践を生かし、学校課題研修においてパートごとに研究授業を行い、成果と課題を共有する。【学期に1回】 教師が教える授業から児童が学ぶ授業を目指し、授業改善をする。【単元ごとに1回以上実施】

② 全国学力・学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	国語では我が国の言語文化に関する事項において、時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くことに課題があった。算数では、台形の意味や性質について理解している児童は4割に達しておらず、ほとんどの児童が方眼上の四角形を台形と捉えるために、向かい合った一組の辺が平行であることに着目できていない現状であった。理科の「物質に関する問題」では、水の蒸発や結露について水の状態が変化するという知識を基に、概念的に理解することに課題があった。 3教科とも令和6年度よりも正答率が低下しており、知識のつながりが弱いことが考えられる。言語・図形・自然現象のいずれも、構造や関係性を理解する力が求められるが、断片的な知識にとどまっている可能性がある。
思考・判断・表現	国語の「話すこと・聞くこと」では、複数の質問を関連付けて聞くことで、聞きたいことを相手から引き出そうとしていると捉えることに課題があった。算数では、「図形」の領域において、基本図形に分割することができる図形の面積の求め方を、式や言葉を用いて記述することに課題があった。理科の「地球に関する問題」では、赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、結果を基に結論を導いた理由を表現することに課題があった。 どの教科においても、言葉で説明する力が不足しており、他者との対話を通じて思考を深めたり、図や表、ICTを活用して思考を整理したりする活動を充実させる。

③

	中間期報告		中間期見直し
	評価（※）	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	低学年においては、毎週木曜日の時間にデジタルドリルやプリントに取り組んでいる。繰り返し取り組むことで定着を図り、取り組む量を児童に決めさせて達成感を味わわせることができた。 高学年では、自分で計画を立てて自主学習に取り組めるようになっているが、苦手の克服のための学習というよりも、児童のやりたい学習やテストに向けて取り組む傾向がある。間違えた内容に粘り強く取り組んでいる児童もいる。	SSDBを活用した児童の実態把握は運用に課題があった。小テスト、練習問題、プリント、振り返り、朝学習の到達度を活用し、実態を把握して、追加の課題を与えたり、重点的に個別に指導したりすることができるようにする。【単元ごとに1回以上】
思考・判断・表現	B		変更なし

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

④ さいたま市学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	算数では全学年共通で「数と計算」において、正答率がよくなかった問題があった。特に、第3学年では小数、第4学年ではかけ算とわり算の筆算や倍を求める計算、第5学年では通分や約分をする計算、第6学年では分数・小数・整数が混合した乗除の計算に課題があった。また、これらは市平均と比べると無回答率も高く、第4学年以降は正答数分布グラフにおいて2つの山ができており、学習内容の定着の二極化や問題に取り組むことが困難な児童もいる、という現状がわかった。 理科では「生命」を柱とする領域に課題があり、「植物の発芽、成長、結実」および「人の体のつくりと運動」に関する知識や技能について、市平均を下回る設問があった。
思考・判断・表現	国語では、全学年共通で「話すこと・聞くこと」に課題がみられた。相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えることや、資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現することができる力が不足していることがわかった。社会科においても、資料をもとに必要な情報を収集し、関連付けながら判断する力に課題があった。 生活習慣等に関する調査の項目「授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していますか」においては、否定的な回答が多く、教科を問わず、主体的対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が必要である。

⑤ 学力向上策の実施状況

	評価（※）	
知識・技能	B	低学年では朝学習での取組が定着し、もくもくと集中して取り組んでいる様子が見られ、基礎学力や問題に取り組む体力が身に付いてきている。 高学年では自主学習に意欲的に取り組む児童が増えてきた一方で、児童が自分で苦手とする内容を認識することが難しく、児童の取り組みたい内容と取り組むべき内容の不一致があった。市学習状況調査での生活習慣等の調査においても、分からなかった点を見直し、次の学習に生かすことに難しさを感じている児童も少なくないことが分かった。児童自身の学力の把握を、いかにさせるか、次年度の課題となった。
思考・判断・表現	A	計画通りに3回の提案授業を実施し、成果と課題を共有した。学びのポイント「じ・し・ゃ・ク」を意識した児童主体の授業を日々実践し、教師が教える授業から児童が学ぶ授業を目指して授業改善をしたことで、「学びの指標」の調査結果の中では、ICTの効果的な活用に関わる質問では全ての項目で第1回よりも第2回の結果が上昇していた。デジタル学習基盤を前提とした授業改善を進められたことが、数値として表れていた。次年度も継続して、研修を進めていきたい。

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

⑥ 次年度への課題と学力向上策

知識・技能	昨年度と比較すると、市学習状況調査における生活習慣等の調査項目「学習した内容について、分かった点やよく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」の回答は、否定的回答が増加している。特に、算数において学習内容の積み重ねが重要であり、二極化が表れ始める第4学年の内容の取りこぼしがないよう、T.Tを重点的に配置し、家庭への協力も仰ぎながら定着を図っていくようにする。児童が分からないことをそのままにせず丁寧に見取れるよう、教科担任制を見直し、次年度は算数を学級担任が受け持つようにする。
思考・判断・表現	市学習状況調査における生活習慣等の調査項目「授業は、自分にあった考え方、教材、学習時間などになっていますか」では市平均よりも肯定的回答が高く、昨年度と比べても数値が向上していた。学校課題研修にて、教師主導の授業ではなく自己決定をしながら学ぶスタイルを研究してきた成果が表れた。次年度も、一人ひとりが自己の課題を見いだし、課題について検討したり改善したりしながら学習を調整する過程を単元計画に位置づけ、協働的に解決しながら力を高めることができるように指導する。児童が資料を提示する際や、自分の発表を振り返るときには、ICTの活用をより推進していきたい。